

春期福音特別集会（3）

キリスト者の愛

——ローマ書第8章31～39節——

1974年3月24日（伊豆高原）

小池辰雄

聖霊のバプテスマ キリストの本願の効力を受けとっていく 神さまは味方であるがゆえに
十字架の贖い 神有 リストの愛より離れしむる者は誰ぞ キリストの愛が爆発する

【ロマ8・31～39】

³¹然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。³²己の御子を惜まらずして我ら衆のために付し給いし者は、などか之にそえて万物を我らに賜わざらんや。³³誰か神の選び給える者を訴えん、神は之を義とし給う。³⁴誰か之を罪に定めん、死にて甦えり給いしキリスト・イエスは神の右に在^{いま}して、我らの為に執成し給うなり。³⁵我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難^{なやみ}か、苦難^{くるしみ}か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。³⁶録^{しる}して『汝のために我らは、終日^{ひねもす}、殺されて屠^{ほふ}らるべき羊の如きものと為られたり』とあるが如し。³⁷然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余あり。³⁸われ確^{かた}く信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、³⁹高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。

●聖霊のバプテスマ

ローマ書8章の最初の部分は御霊の内住、聖霊のバプテスマですね。御霊のバプテスマが今のキリスト教の世界では——日本といわず、どこの国といわず——非常に希薄になつてしまっていることが最大の欠陥であります。今から十年も前に私はドイツでそのことを叫んで、教会の新聞にまで書いてきたけれども。

大体、使徒行伝の真つ先が聖霊のバプテスマ、ペンテコステです。それから、福音書の真つ先がやはりそうです。キリストがヨルダンで聖霊のバプテスマを受けておられる。その聖霊のバプテスマは、キリスト自身のご生涯においても決定的な出だしである。キリスト教の歴史においても御霊のバプテスマは徹底的な出だしである。であるのに、クリスチャンがこの聖霊のバプテスマをハッキリ受けないで、それで「信仰生活の、キリスト教の」な



なんていうのはおよそおかしい話です。

そういう意味において、この御霊のバプテスマということは絶対に必要な要である。御霊のバプテスマを受けるその土台はこの十字架である。キリストの十字架の贖いをハッキリ受ける。と同時に、そこにはバプテスマが来る。あるいは逆に、御霊のバプテスマを受けると、本当に今度は十字架が受けとられてくる。パウロ自身がそうだった。復活のキリストに撃たれて、聖霊のバプテスマを受けて、

「わが眼より鱗の如きもの落ちたり」

と。けれども、彼はすぐそのまま立たなかった。彼はアラビヤにおいて祈った。そして、祈りの世界でキリストの十字架が何であるかを彼はハッキリ受けとって、彼の書簡の中にあれほど深くこの十字架のことが語られている。

「十字架につけられたままのキリストの他は何^{なん}とも語るまじと思う」

なんてことまで言っている。旧約聖書におけるところの「羔の贖い」ということを何回やっただけで、これはヘブル書に書いてあるとおり、

「ただ一回、キリストはこの贖いの大業を成し遂げて、それで既に贖罪は完了したのである」

と言われている。この徹底的な十字架の贖いによって私たちはぶつとばされている。本当に贖いとられているから、もはや問題はない。そこに本当に御霊が臨んでくるんですから。十字架と御霊のバプテスマは離すことができない。ということは、福音書においていくらペテロやヨハネがキリストの近くにいても——それは瞬間的には御霊は臨みます。そして御業も行われます——けれども、決定的にならないから、ペテロは沈んだり浮いたりしてどうにもならん。最後にはキリストを否んでいる。でも、キリストはその先のペテロを見ている。

「今にお前は本当にバプテスマを受ける。私が十字架にかかり、わが受くべきバプテスマを、

この時言われたキリストのバプテスマとは十字架のバプテスマです。

血のバプテスマを受けて、向こう側に行ってから、初めてお前の中に本当に聖霊が臨んだら、変わるぞ。その時、私が言ったりしたことが全部分かってくるぞ」

と。その通りです。使徒行伝のペテロはまさにそうですね。そういう意味において、8章の真ん中でパウロが言っている、

「御霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

と。「御霊を宿している者だけが本当のクリスチャンであるぞ」ということはそういうわけ



●キリストの本願の効力を受けとっていく

なおしかし、本当に全世界が新天新地の神の国になるその現実はまだ来ていない。キリストも使徒たちもその最後の日を間近に望んでおられた。二千年経ってもまだ来ない。けれども、明日にもその時が来ると、私たちは質的にはいよいよ迫りを感じて、神の国を待ち望んでいるわけです。その待ち望みの、その望みは、この贖いの完成を呻き求めている。大自然も然り、また一人ひとりも然り、また聖霊も然り。今日のところに、

「キリストの執り成し」

という言葉が出てきますが、それがこの呻きです。呻きは祈りの呻きです。これを霊願と申します。あるいは、悲願といってもいい。悲願霊願がこの本願に応じて、そこでもって祈る深い祈りです。これは必ずきかれる祈りです。望みは必ずたつせられる。その祈りは必ずきかれていく。

いいですか。祈りの中で、「これはきかれるだろうか」なんていう気持で祈っていたら、これは絶対にダメです。

「祈りたることはきかれたりとせよ」

とキリストは言われた。未来完了を現在完了にしていけと。根源の現実を常にいつも受けとりながら進んで行けと。現象面はどうであってもいい。いろいろな現象面では矛盾も起きる。けれども、いいです。その奥の根源現実、根源現象の世界では必ずそれが成っている。そうすると、御意に従って神さまは、いわゆる現象面においても自由になさる。その祈りは、確信ならざる確信を持つて祈っていく。御意を求めて、

「あなたのご栄光が、あなたの御意が成るように」

と言って、自分を捨てているところの祈りは、どんなに逆のことを祈っても、それが引つくり返されながら実現していく。きかれないことが本当にきかれている。だから、もう私たちにとっては、

「然り」

の他はないんだ。「否」なんてものはありはしない。すべて「然り」でいくわけです。そういうところに必ず力がくるんです。

あなた方一人ひとりがみなそれぞれの生き方をしていらつしやるのが私には見えてくる。問題は、決して屈しないことです。「屈しない」とは、なにも意気込むことではない。キリストの本願の効力を受けとっていくことです。

これは浄土真宗の親鸞の『歎異抄』のあの図太い信仰です。素晴らしいものです。あの親鸞の『歎異抄』を世界の大神学者カール・バルトが読んでびっくりしたという。

「東洋にこんな素晴らしい信仰があるか」

と。西洋の信仰は、西洋のキリスト教は負けですよ。それくらい私たちの仏教の先輩には素晴らしい人がいた。そいつに福音が入ってきたら、一番素晴らしいことです。日本人は



一番素晴らしいものを受ける、過去の精神的な土台を持っている。仏教にしろ儒教にしろ。私たちの大事な過去を本当に生かすものはこの福音の他にない。藤井先生が「聖書より見たる日本」という論文を書かれましたけれども、あの通りです。ただ先生においてはまだこの聖霊の事態が——本ものでないと言ったらわるいけれども——やはりまだ次元がちよつと。そこは私たちが、手島さんの私のようなやつが、今、若い方々と一緒にいいよ先に進んで行こうというわけだ。使徒たちの次元は凄いんだから。パウロさん、ペテロさん、ヨハネさんと同質になつていかなくてはどうしようもない。

キリストのヨルダンのバプテスマ、それからペンテコステのバプテスマを私たちは——キリストのまねはできないけれども——今のクリスチャンがすべきであり、また友人をそこまで持つていくようにしなくては。私はこういう集会をするとね、「ああ、あの人はここに来てほしかったな」と思うですよ、正直。まあ、どういう差し障りがあつたかしらんが、集会というものは——人生はある瞬間をつかまえることが大事なんだからね——一切を蹴飛ばして進んで行かなくてはいかん。

●神さまは味方であるがゆえに

31 然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。

これは非常に烈々たる言葉です。原文はそう書いてある。「神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや」と。しかし、なぜ、パウロはそんな言い方をするか。

「神さまが私たちの味方であるから、誰か我らに敵せんや」

と、事実をハッキリ、パウロに言ってもらいたかつた。事実なのに、なぜ、「もし」なんて言うか。「もし、味方ならば」と仮定して言っているけれども。しかし、パウロの真意は、

「神さまは私たちの味方ではないか。誰か我らに敵することができるか」

と。どうぞ——パウロ自身が、「儀文は殺し、霊は活かす」と言ってくれているように——パウロの言葉のもうひとつ奥を読んでください。「もし、味方ならば」とただ文字通り読んだら、力は来ませんよ。パウロが「もし、味方ならば」と言っているけれども、パウロは、

「神さまはお前たちにとっては味方ではないか。誰か私たちに敵することがあるうか」

と、パウロの言葉を直ちに現実として、仮定としてではなくて、現実として受けとつていくこと。ギリシア語はそう書いてあつたつていいよ。その奥を読んでいただきたい。

「東洋には聖書をずいぶん勝手に読むやつがあるが、それは勝手ではない。それは本当に私の真意をとらえてくれたんだ」

と、パウロは喜んでいると私は思う。どうぞ、そういうようなわけで、もうとにかく、すべてを現在・一人称・単数ないし複数でもつて読んでいくこと。三人称でなんか読んでた



らダメですよ。仮定で読んでいたらダメです。これは仮定ではない。現実、現在です。

「神さまは味方であるがゆえに、誰か我らに敵せんや」

と。「神さまが味方であるがゆえに」というのは、私たちはキリストをいただいていれば味方です。神さまは、直接には私たちはなかなかいらないんだから。キリストは私たちの味方。詩篇46篇にも、

「神はわれらの^{さけどころ}避所また力なり、なやめるとき^{いと}の最ちかき助なり。」(詩篇46・1)

とある。神は味方である。避所である。私たちは、サタンとの戦いでは神さまという隠れ蓑の中に隠れてしまふ。そうすると、そこには無限の力があるから、ちつとも恐くない。私たちを守りたもうところのキリストは最高の霊でいらつしやるから、なにも恐くない。

「南無阿弥陀仏」「南無妙法蓮華經」がそれぞれの世界で本当に寄り頼むところであつたら、日蓮が「南無妙法蓮華經」を唱えれば、龍ノ口で斬ろうとするやつがぶつ倒れる。本当に空念仏でなくて全託して祈っている世界は完全にそこに神さまは働いてくださる。

でありますので、神は我らの味方である。実力である。神さまは私たちの実力である。キリストにおいて私たちを守りたもうから、誰か敵せんやと。負けているようだが、実は勝っている。「負けるが勝ち」という言葉があるけれども。だから、敵が可哀相になるですよ、気の毒になる。そういう意味においても、天下無敵なんだ。敵なんてものはなくなってしまう。どんなにいきり立とうが、権謀術数をしようが。サタンも乳飲み子を刺すわけにはいかない。無心の幼児の姿には神が宿っているから。

そういうことで、私たちには、「神は、もし」なんて読んでいられない。

「神さまが実力の味方いらつしやるから、誰か敵せんや」

と、それを身体^{からだ}で受けとつて読んでいなければダメです、からだで。頭ではダメだ。それは祈りですよ、祈り心です。この一句を瞑想して読んでいるうちに、もう力が来てしまふ。

●十字架の贖い

32 己の御子を惜まずして我ら衆^{すべて}のために^{わた}に付し給いし者は、

これが愛です、神の愛。御子を惜しまずして、神さまはこのキリストを、私たちを救うためには、捨てなさる。

「わが神、わが神、なんぞ我を捨てたまひし」

とキリストは叫んだ。あれは神の義の叫びです。

「なぜ、お捨てになったか。私は生涯、かくもあなたの御意を貫いてまいりました。

それなのに、なぜお捨てになったか」

と。それはあるまじきことです。これほどあるまじきことはない。キリストが捨てられることほどあるまじきことはない。そのあるまじきことを神さまがなさったのは、もうどうにもならない人間を救うためのただ一つの道であつた。神の義をキリストはあの



「なぜ、捨てたまいし」

と叫んだわけです。

「神さまと私の間がかくも義であるのに、乾坤を貫いているところのこの義の世界がなぜ破られたか」

と。それはクロスしているところの十字架になるわけです。愛のゆえに。愛とは救いです。愛するとは救うことですから。私たちを神さまは、「世を愛したまえり」とある。

「独り子を捨てるほどに世を愛したまえり」(ヨハネ3・16)

というのは、捨てるほどに世を救わんとされた。捨てて世を救いたもうた。それなのに、

「救われているのに、なぜ、その救いの中に入ってきてませんか」

というわけだ、神さまの方から言えば。

「こんなにお前たちは救われているのに、なぜ、この救いの網の中に入ってこないか。網から逃げよう逃げようとしているか」

と。網を破ってしまった。そういうわけです。

それは旧約の宗教をここでもってアウフヘーベンしたわけです。旧約の宗教を成就した。即ち、羔の贖い、犠牲即ち、罪の贖い。神に背いてしょうがないやつを、もうその罪を全部御破算にしてみました。

「だから、来なさい」

と。その神さまの他に行きどころがあるんですか。それに感激しないで、神さまの他に行きどころはない。それが十字架の贖いということ。その罪は全部、御破算にしてください。

「さあ、無条件に来なさい」

と。無条件に。条件を付けられたら、我々は神さまの世界なんかに戻れませんよ。無条件です。ダメなまんま、分裂のまんま、頑ななまんま、帰っていきます。変わるんですよ。あるがままで行くと変化させられていく。この霊的变化というのは化学変化よりも凄いだ。だから、この御霊でもって救われたクリスチャンはちがうんです、正直。自分たち自身がそう感ずるですよ、「なにか違ってしまったな」と。

「相変わらず人間は躓いたり転んだりするけれども、しかし、どうも違うんです」

ということがハッキリ言える。ところが、片一方の道徳的な人は、質的にはちつとも変わらないで、ただ制度的に変わっている。良さそうだけれども、いつまでたっても、これはダメなんだ。ところが、御霊の救いの方は、

「相変わらず躓いたり転んだりして、あれはしょうがない野郎だな、けれども、どこか違うな」

ということになる。この「どこか違うな」というのが本当に勝っていく。それは神さまの御霊の救いによる。「御霊を宿したから、お前は聖人でなければならぬ」なんて、そんなバカなことではない。アウグスティヌスといえども、最後の死の床で詩篇32篇の、



「その愆^{とが}をゆるされその罪をおおわれしものは福^{さいわい}なり。」(詩篇32・1)

という句を掲げて、本当に彼は感謝して逝ったという。我々の確信ならざる確信、自信ならざる自信、変わらないようだけれども本当に変わっているという、それが即ち御霊の救いによる。

「己の御子を惜まずして我ら衆^{すべて}のために付^{わた}した」

というのは、神さまはそういった救いを、決定的な贖いをなしてくださいました。

無教会は「十字架、十字架」と言つて、十字架を常にただ繰り返して、こつち側から十字架を仰いでいる。内村先生が、「十字架を仰ぎ見る」なんていうことをよく仰つたものだから、またそれを拳拳服膺している。ただ仰ぎ見ているばかりではダメだよ。パウロさんは言っているではないか、

「われキリストと偕に十字架せられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生き給うなり」(ガラテヤ2・20)

と。

「私はキリストと共に十字架されました。もう生きてはいません。私は――それは人間小池は相変わらず生きているけれども――本当は根底的には死んでいます。けれども、キリストが生きてますよ」

と。御霊のキリストが私の中で、皆さんの中で生きている。このことを無教会の人が知らないことはない。答案を書かせれば、ちゃんと満点の答案を紙の上では書くよな。けれども、それは本当からだで受けとつていないから、手島さんや私が聖霊のことを言うと、「あいつらは少しおかしくなった」と言つて、除け者にされて白眼視されてしまう。そして、少し現象的にいろんなことが起きると、「あれは御利益教だ」なんて批判する。そうじゃないですよ。そういうことを言うなら、まず使徒行伝はおかしいと言ってもらいたいんだ。使徒行伝のおかしさに比べれば、私たちのおかしさなんてまだとても足りない。鎖が切れたりするようなおかしさにはとてもかなわんですよ。

●神有

³²己の御子を惜まずして我ら衆^{すべて}のために付^{わた}し給いし者は、などか之にそえて

万物を我らに賜わざらんや。

という、盛んな言葉です。宇宙を散歩するようなところです。「無一物無尽蔵」という言葉があるが、その通りです。私たちは何も自分のものは持っていない。無一物です。なるほど、私有物がありますよ。けれども、実は私有していないんだ。根本的にはこれは神有である。神さまのものなんだ。みんなお預かりものだ。何を持っていようが、みんな神さまのものだ。私たちは次の世界に行くときには、「聖書だけは持って行きたい」なんて言つたって、持っていけない。天国には聖書は要らない。聖書よりか活けるキリストにぶつかるからね。聖



書というのはキリストのただ暗号だから。キリストの暗号ではなくて、キリストにぶつか
るから、もう聖書も要らないという。何も要らない。向う側に行くときには何も要らない。今、
地上で持っているものはみな神さまのお預かりものだ。ここは拝借物ばかりだ。共產主
義だの何だのと、共有だの私有だのと言っているけれども、もうひとつ奥の世界を、神有
ということを知らない。どう考えたって、究極の真理はそこにある。だから、パウロも言
っているではないですか。

「有れども無きが如く、無けれども有るが如し」

と。なぜ、あんなことが言えるかというと、そういう境地だからです。コリント後書6章
8節に、

はずかしめ あしきこえ よきこえ

「8また光榮と恥辱と悪名と美名とによりて表す。我らは人を惑わす者の

如くなれども真、^{まこと}9人に知られぬ者の如くなれども人に知られ、死なんとす

る者の如くなれども、視よ、生ける者、懲^{しら}ざる者の如くなれども殺されず、

10憂うる者の如くなれども常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの人を富

ませ、何も有^もたぬ者の如くなれども凡^{すべ}ての物を有てり。」(コリント後6:8)

10)

と。面白いことをパウロは言う。彼の魂はそんな弾力性を持っていて、何ものにもこだわ
らない。

おなじ「無」といっていても、仏教的な無の悟りとは違うんですよ。やはり、仏教は、ど
ちらかというと、悟りの境地が多い。福音の無は悟りではない。もつと、どういうことに
おいても、それにとらわれず、こだわらずして、しかもそれをどしどし善用していく。そ
ういうような、すべてのものを本当に善用し活かしていく。そういう意味において、福音
は内容が非常に豊かなんです。仏教の世界はクリエイティブな創造的な角度がどうも薄い
ことは事実です。けれども、福音の世界はやはり創造の神ですから、創造の神と共にいつ
も私たちは創造的な人であります。神の国、新天新地に向かって行くんだから、驚くべき
世界を創造する。だから、文化の推進力のあるのはこの福音である。本当の推進力である
この福音を持たないから、この文化文明が危うくなって、このままいけば今にぶつ倒れて
しまう。人間は自分の知恵や才能や何かを全部私しているから、それは恐ろしい。そうす
ると必ずこれは引っくり返る。だから、どこまでもこの神有^あの自覚の中に入っていかな
いとダメです。

などか之にそえて万物を我らに賜わざらんや。

何も持たないけれども、一切を持っている。無一物無尽蔵という事態が、「万物を賜わざ
らんや」と言つて、私は大自然を見ても楽しくてしょうがない。「あれはこの所有地だろ
うか」なんて、そんなことは考えない(笑)。「ひとつあそこらを買って金儲けしようか」な
んで、この世的な知恵はそういうように働くけれども、それとは違う。人のものであろう



と何であろうと一向差し支えない。これは全部神さまのものとして楽しくこれを愛していることができる。

●キリストの愛より離れしむる者は誰ぞ

33 誰か神の選り給える者を訴えん、

「神さまが選んでくださっている」というのは恩寵により選んでいる。その恩寵によるところの選り給えようがない。こつち側の資格ではないから。神さまの絶対の恩寵によって選り給えているんだから。選り給えているということはまた、必ず人を福音にもたらす責任を持っている。「予定説」なんていうけれども、選り給れた人たちは人をまた救う。ただ予定には順序があるから、まずこいつを捕まえて、それからだんだん広めて行こうと。「選り給れたから、これでよし」なんて、そんな世界ではない。責任があるから、どしどし、人たちを救っていく。選り給れたある人は、人たちを助け救っていくところの責任と使命がある。そして、そこに光榮があるわけです。

神は之を義とし給う。

と。キリストの恩寵によりこれを義とし給う。

34 誰か之を罪に定めん、

これはもうローマ書8章の基底ですから。

死にて甦えり給ひしキリスト・イエスは神の右に在^{いま}して、
我らの為に執成し給うなり。

「神の右」と言っただけで、どっちが右だか左だか、いわゆる相対的物理の世界ではわからない。ただそういう言い方をするわけです。

「神の右に在^{いま}して、我らの為に執成し給うなり」

と。キリストが執り成したもう。これは大祭司です。キリストは大祭司であり、大預言者である。大祭司という言葉はヘブル書にたくさん出てくる。即ち、聖霊の執り成し、キリスト自身の執り成しです。恩寵によつて救われた者は、これはもはやどうにも訴えようがない。これは完全に神のものですから。義とし、義を与えて、そしてキリストが執り成したもう。

35 我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、 患難か、苦難か、迫害か、

誤解か――なんては書いてないが――

飢か、裸か、危険か、剣か。

「剣」というのは、殉教のことを言う。

36 録して

これは詩篇44篇22節、

『汝のために我らは、終日、殺されて屠らるべき羊の如きものと為られたり』



とあるが如し。

汝、神さまのために我ら初代のキリスト者たちは終日、殺されて屠らるべき羊の如きものと為られたと。即ち、そのようなキリストの十字架の一端を負いながら、これを担っていく。

³⁷然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余あり。

「勝ち得て余あり」という訳は大変結構な訳です。勝ち得て余りある、もの凄い勝利であると。愛には実力がある。決して感情の愛ではないから。

「愛は一切に勝つ」

という。ヒルティの墓標にそう書いてある。最大の力は愛ですから。愛は最大の力であり、相手をぶつ倒す力ではない。相手をすくい上げるから最大の力である。敵をも救い上げてしまうから。天下無敵というのはそういうことです。敵を無くしてしまつて、みんなサタンから奪い取つて味方にしてしまう。最後にはサタンも降参するといひんだけれどもね。

そういったキリストの愛は力ある愛ですから、キリストの愛の力以上の力がどこにあるかという。それを深く受けとつてごらんさいよ。現実にはいろんな問題がある方がいい。あまり問題がないとボヤボヤしちゃうから。いろいろな問題があつて結構です。悩みがあるのは神さまに愛されている証拠ですから。それで神の力を体現していく。勝ち得て余りありという。

敵の兵隊を担いで野戦病院に連れていく、そういう日露戦争の日本兵の武士道的精神を描いた大きな油絵を私は小学校4年のときに見た。あれを見た印象は一生忘れることができない。日本の兵隊さんは偉いなと思つた。それが即ち、敵を担ぐところの愛なんです。怪我をした者を殺しはしない。ところが、戦場では実に悲惨な残酷なことがたくさん行われていたし、今も行われているだろうと思うけれども、本当の武士道はそんなものではない。武士道とはそういう本当の人間性を持ったものです。とにかく、我々の戦いというのは敵を倒す戦いではなくて、敵を救い上げる戦いだ。信仰でよく「戦い」という言葉を使うけれども、それはサタンと戦うんです。悪霊と戦うのであつて、人間そのものと戦うのではない。人間を悪霊から奪い返す。

「聖書に『神は我らの衷に住ませ給ひし霊を、妬むほどに慕いたもう』と云え
るを虚しきことと汝ら思ふか。」（ヤコブ4:5）

と、ヤコブ書4章5節に書いてある。そのようにこの私たちの魂を愛惜しておられる。とにかく、居ても立ってもいられないような神さまの、キリストの愛ですよ。皆さん、人ごとのような顔してたらダメですよ。この中にそういう人はいないと思うけれども。

●上からの愛に圧倒されて

³⁸われ確く信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん



者も、力ある者も、

と、なぜ、パウロはこんな言い方をするのでしょいかね。「死も生命も」と、全然反対のようなことを言っている。ということは要するに、「この世の相対的な意味におけるプラスもマイナスも」ということなんだ。そこにプラスもマイナスも出ている。

「相対的なプラスもマイナスもそんなものは問題じゃない」という。

我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。

やれ、文化文明なんて言ったって、要するに、人間の造り出したところの相対的な価値判断、そんなものはどっちでもいいんだと。価値判断だったら、キリストの愛の価値に来てくださいよ。

エペソ書3章16節に、

「¹⁶父その栄光の富にしたがいて、御霊により力をもて汝らの内なる人を強くし、

御霊による力をもて汝らの内なる人を強くし、

¹⁷信仰によりてキリストを汝らの心に住ませ、

「キリストを住まわせる」とパウロは言っているのではないよ。キリストは天界にいるんだけれども、「お前の中に住んでしまったら、他には住まないか」なんてなことではない。住むのは御霊のキリストです。あるいはキリストの御霊と言ってもいい。パウロはそんな分析的なものの考え方をしないから。

汝らをして愛に根ざし、

根っこは愛だぞと。愛を根っことしろということです。そして、

愛を基とし、¹⁸凡ての聖徒とともにキリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さ

の

といういろんな価値判断の、

如何許なるかを悟り、¹⁹その測り知る可からざる愛を知ることを得しめ、

測り知ることのできない愛をよく知ってくれと。

凡て神に満てる者を汝らに満たしめ給わん事を。」(エペソ3・16～19)

と。素晴らしい言葉です。パウロは書簡の中で時々、叫んでいるんです。理屈を言っているのではないよ。たまらないから、彼は。

³⁹高きも深きも、此の他の造られたるものも、

そういった一切の造られた相対的などんなものも、そんなものがどんなに善かろうが悪かろうが、そんなものは問題じゃないと。「あつ、これはなかなかいいものだ。ちよつとキリストの愛の方はそつちのけにしておこう。音楽はいいな、文学はいいな」なんて言っ



文学や音楽や絵画にとらわれてしまつて、キリストの愛がどこかへ行つたら、とんでもないですよ。文学であろうと、音楽であろうと、絵画であろうと、事業であろうと、何でもあろうと、全部キリストの愛を表現し、キリストの愛を体現しなければウソなんです。商売であろうと、何であろうと、みんなそうです。

我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。

「キリスト・イエスにある」

というのは、これもまた

「エン・クリスト」

ですよ。もう、「イン・クライスト」「キリストの中」はこのローマ書8章の基調だから。

「キリストの中にあるところの神の愛」

です。神の愛なんて、ただ観念で言っているのではないよと。

「キリストの中にあるところの、キリストに具現しているところの、キリストに内住しているところの、イエス・キリストが身をもつて表わしているところの、この神の愛から私たちが何が離すことができるか。これが一番もの凄いな」

と。上からの愛に圧倒されてぶつ倒されなければいけません。愛に圧倒されてぶつ倒れなければ、神さまがキリストに表わしたこの愛に。ついには十字架にかかつて自分を捨ててまでも、捨身の愛なんです。この捨身の愛に感激しないやつは人間ではないな。

●キリストの愛が爆発する

「キリストの愛から私たちを離さしめるものは何もない」

と、パウロが言つたら、そのあとに何か余韻が響いてこなくてはいけません。どんな余韻が響いてきたかな。それでお終いではないですよ。キリストの愛は私たちをそのように圧倒すると、こつちが体受すると、今度はこつちは体現するんです。もし、その人を通してキリストの愛が爆発しないならば、キリストの愛を受けているのではない。

いいですか。これはハッキリ、あなた方に言うから。キリストの愛にただ酔つてお終いでは、本当は酔っていない。本当にキリストの愛に酔うならば、圧倒されるならば、そいつが爆発しなければいけません。爆発しなければダメ。体現しなければダメです。キリストの愛が現われていないようなクリスチャンはキリストの愛を受けていないんです。キリストの愛を本当に受けていけば、必ずそれは体現するんです。あなた方の実存に、それが小さいことといえども大きなことといえども、地道に現われてこなかったならば、それは本当に聖霊の人とはいえない。御霊の人はこの愛が常にこぼれ、流れ、溢れ、爆発するような、そういう人がこのキリストの愛を受けている。

「このキリストの愛から離れることができない」



というのは、このキリストの愛を人に与えざるを得ない、こぼれざるを得ないんです。そうすると、無限に上から来る。もはや、何も恐いものはない。君たちの愛を妨げるものはない。

「私たちの中にあるこのキリストの愛が分からないか」

と、事実をもって証明してください。事実をもって証明したらば、相手は必ず降参する。今、君たちにはいろいろな問題がある。しかし、その事実をもってキリストの愛を現してください。必ず勝つから。そのように体現しているところにキリストの愛はいよいよ離れない。いよいよ力強く守ってください。

手島さんが天界に行っても、なおそのご連中がいよいよ進んでやまないのは、そのような愛が溢れて進んで行くからです。御霊の子らは絶対に、先生が天界に行っても、いや行けばいいよ――

「わが去るは汝らに益なり」

と彼は言っているかもしれないが――手島さんが地上にあつたときよりも、あのお弟子さんたちは強くなる。私はそう信じています。そのような具合にあなた方も、この武蔵野幕屋からいろんな事情で出て行った人たちは、外でもつてこのキリストの愛を体現していく。そして、私たちは時間空間を超えて本当に結ばれて、もはや、えしやじようり会者定離と言つてただ諦めている世界ではない。もつと福音の世界はもの凄いんです。

キリストはかくして、二千年前にユダヤの一角に現われて、ただ十字架にかかったけれども、どっこい、世界の歴史を動かしている。世の末に至るまでこのキリストの愛は天界から、人々を捕まえては、御霊の愛をもってこれを展開してやまない。これ以上の力がどこにあるかと。どのような武力もみんな倒れていく。ナポレオンもヒトラーもみんな没落した。

「私はやはりナザレのイエスにはかなわない」

と、ナポレオンはセントヘレナで言いました。そして、彼は福音書を読んだら、

「福音書は本ではなかった、これは活ける何ものである」

とナポレオンは驚いた。そのようなわけでありまして、もう絶対にこの福音は人を救い上げていくところの愛であります。あなた方にそれが働く。相手がどんなに行き詰まった現実であろうと、大丈夫です。それを事実をもって証明してやってください。君たちがもしそれを体現しないなら、私はいつでも集会を閉じてしまうから。

もうパウロさんと共に、この「信・望・愛」が霊でもって貫いているところの事態、これはある意味においてローマ書の絶頂です。これでこの集会は終りいたします。

